

Murat Şiviloğlu 著『公論の誕生 ——オスマン帝国末期における国家と社会——』を読む

Book Review: *The Emergence of Public Opinion: State and Society in the Late Ottoman Empire* by Murat Şiviloğlu

村田 七海
MURATA Nami

東京外国語大学大学院博士前期課程
Tokyo University of Foreign Studies, Master Student

キーワード
オスマン帝国 近代化 公論 公衆 ハーバーマス

Keywords
Ottoman Empire; Modernization; Public opinion; Public; Habermas

原稿受理日: 2022.1.9.
Quadrante, No.24 (2022), pp.309–320.

目次

1. はじめに
2. 本書の構成
3. 本書の意義と疑問・批判点
4. おわりに

1. はじめに

本稿では2018年に出版されたムラト・シヴィルオール (Murat Şiviloğlu) 著『公論の出現——オスマン帝国末期における国家と社会——(*The Emergence of Public Opinion: State and Society in the Late Ottoman Empire*)』に関する考察を行う。本書はシヴィルオールの博士論文を基に書かれたものであり、オスマン帝国において、近代化政策と連動する形でいかに公論が出現し、政治的影響力を有するに至ったかが語られる。シヴィルオールは19世紀オスマン帝国における社会史、思想史を専門としている。ケンブリッジ大学で博士号を取得し、現在はアイルランドのトリニティ・カレッジで助教授を勤めている。

本稿では、4節に分けて本書の考察を行う。

第2節では本書の内容について、本論の各章の内容を概観しつつ、著者の主張をまとめていく。第3節では、まずオスマン帝国における国家と社会を巡る研究史を紹介したあと、本書の研究史上における意義を説明する。その後、本書に対して筆者が感じる疑問点・批判点を提示し、第4節において本稿を簡潔にまとめる。

2. 本書の構成

本書では、18世紀後半から19世紀オスマン帝国における公論の出現とその発展過程に主眼が置かれている。全6章から構成される本論では、オスマン公論が政府による近代化政策と不即不離の形で発生したことが様々な角度から示される。

第1章「歴史的背景(Historical Background)」では、その後の公論の出現を準備することになった、18世紀後半から19世紀前半にかけての近代化初期過程が考察される。この過程でオスマン帝国の旧来からの秩序を構成していたイエニチェリとアーヤーンが政治舞台から排除されたことの重要性を著者は指摘し、これに



よりオスマン公論が、後に社会全体へと広まっていくなか、地歩を得たとする¹。

18世紀を通じて、帝国内では徴税請負制を利用して、各地で地方名望家が台頭した。アーヤーンと呼ばれたこれらの名望家は独自の軍隊を所有するほどの勢力を誇るようになり、中央政府を脅かす存在となっていた。セリム3世とマフムト2世によって進められた近代化初期過程では、こうした地方分権的な帝国秩序を再集権化することが課題となった。スルタン・セリム3世（在位1789～1807年）と、続くスルタン・マフムト2世（在位1808～1839年）によるアーヤーンの国家システムへの取り込みと討伐は、地方の帝国臣民を、中央権力の一元的な支配のもとに置くことになるが、こうした政治形態の変化による影響として、政治的に分断されていた人々が新たな統一的権力の下に置かれることで、帝国内で一体的な公衆が形成されていったことを著者は指摘する²。また中央集権的統治体制が敷かれることで後に続くタンジマート時代に、中央政府において官僚制が発達したことにも言及する。

一方で、中央におけるイエニチェリの解体も公論の出現を準備した。スルタン直属の近衛歩兵であったイエニチェリが17世紀以降、副業を営むようになり在野化、そして無頼化が進み、様々な改革に対する反対勢力へとになっていったことはよく知られている³。シヴィルオールは、イエニチェリとスルタンの政治的対立の帰趨が、歴史的に公衆の支持に左右されていたことを指摘し、17～18世紀におけるイエニチェリの政治介入は、在野化したイエニチェリと公衆との協働の産物であったとみなす⁴。しか

し、19世紀以降、イエニチェリの独占的な経済活動が変化する社会経済的環境に対処できなくなっていることを感じた公衆のイエニチェリからの離心や、マフムト2世による公衆の支持獲得のための施策によって、こうしたイエニチェリと公衆の間の協力関係が成り立たなくなった。著者は、スルタンの勝利は、こうしてイエニチェリが「公衆の嫌悪の対象」となったことで可能になったとしている⁵。以上を踏まえて著者は、すでに公衆の支持を政治的正当性の源泉としていたオスマン政治文化の存在を確認しつつ、イエニチェリの解体によって、それまでイエニチェリが担っていたスルタンへの対抗勢力という政治的空白が発生したことを指摘している。イエニチェリの解体は、新たな政治主体が国家への批判を請け負うことを可能とし、やがて、近代化の推進と連動する形で、こうした空白に政治的主体性を持った公衆が出現してくることになる。

この章では、公論の出現という観点から、この時期に行われた他の政策も取り上げられる。セリム3世の即位前にあたる1775年のオスマン帝国初の国内債券の発行は、地方名望家の財政的独占の取り崩しと歳入の増加が目的とされた。債券は非ムスリムや女性を含めたあらゆる社会階層の人々が購入することができ、やがて債券保有者は国政を批判的に議論することになった。一方で、国家もこうした債権者からの信頼を得るために尽力していたことが指摘され、やがて政府は公衆を意識するようになったと著者は述べる⁶。またイエニチェリ解体後の政策の中では、著者はとりわけ1831年に発刊が開始されたオスマン帝国官報『諸事

¹ Şiviloğlu, Murat, *The Emergence of Public Opinion: State and Society in the Late Ottoman Empire*. New York: Cambridge University Press, 2018, pp.24–25.

² Ibid., p.42.

³ 林佳世子『オスマン帝国500年の平和』興亡の世界史 10、講談社、2008年、pp.220–222.

⁴ Şiviloğlu, pp.49–50.

⁵ Ibid., pp.49–51.

⁶ Ibid., pp.30–38.

曆報 (*Takvîm-i Vekâyi'*)』に注目している。当新聞は、スルタンによるプロパガンダの道具として利用され、公衆の支持の獲得が図られた一方で、読者は国外の情報に触れる機会を得ることになり、西洋社会から「公益 (*menâfi'-i âmme*)」、「治安 (*emniyet-i âmme*)」などに公衆によって利用される概念が初めて輸入されたことが指摘される⁷。

第2章「官僚的公共圏 (A Bureaucratic Public Sphere)」では、タンジマート期に、官僚たちの邸宅で開催された集会 (*meclis*) が取り上げられる。こうした集会は反政府的な性格のものから文学的な集まりに至るまで多様な様相を呈したが、タンジマート期を通じて、官僚層がスルタンに代表される宮廷勢力に対して勢力を伸長していくとともに強い政治性を帯びるようになった⁸。著者は、こうした集会が発生したこの期間を、社会で広く政治的議論がなされ、オスマン公論が出現するに至るまでの過渡期として位置付けている。

本書において、これらの集会は大きく3種類に分けられている⁹。1つ目は、高級官僚の邸宅で開催されていた集会である。こうした集会はオスマン官僚内でのパトロン-クライアント関係が築かれるための社交の場となり、官僚登用において制度的な役割を果たすことになる。そして、集会を通じて官僚達の間で改革思想が共有されたことは、官僚間の文化的一体性を促進し、西洋的価値と思想を身に着けたタンジマート官僚の再生産が進むことになった。2つ目は、政府への抵抗の拠点となった集会である。こうした集会では、邸宅が持つ非公開性を利用して政府に対する批判活動が発達した。やがてこうした集会から、1860~70年代にかけて憲

政の樹立を求めた、新オスマン人運動も生まれることになった。3つ目の集会は文芸批評の場としての集まりであり、女性主催者も見られるこの集まりでは詩人が自らの名声を高めるための機会を得た。

しかし、シヴィルオールはここで分類された集会の境界線が非常に曖昧であったことに注意を促す。なぜなら、タンジマート官僚とスルタンの対立が深まるにつれ、多くの集会で政治的批判を伴う議論が展開されるようになったからである。そして、こうした議論において、官僚たちは自らの正当性を公益の擁護者という立場に求めるようになった¹⁰。また、著者はこうした議論において、議論におけるイスラムの伝統的礼節であるミュナーザラ (*münazara*) が重視されていたことにも触れている。社会的地位に囚われず、参加者同士の平等が前提とされるミュナーザラに基づいた議論では、意見の理論性が重視された。本書ではこうした姿勢は、議論における理論性の優位を主張することで社会的上位にいるスルタンへと対抗するために生み出されたと主張されている¹¹。政治的議論はやがて官僚の邸宅の外へも広がり、オスマン社会に浸透していくことになった。

また、この章では1860年代にオスマン帝国で広まったフリーメイソンによる活動もこうした集会の中の1つの形態として紹介される。著者は、ナームク・ケマルを含めた多くの新オスマン人や、1908年の青年トルコ革命の中心グループの1つとなる統一と進歩委員会の多くのメンバーもフリーメイソンに所属していたことに言及しながら、こうした組織に見られた秘匿性がオスマン帝国における近代的な意味での公私の区分の表れであったことが述べられ

⁷ Ibid., pp.70-71.

⁸ Ibid., pp.82-83.

⁹ Ibid., p.84.

¹⁰ Ibid., p.90.

¹¹ Ibid., p.105.

る¹²。

第3章「イスマイル・フェルフ・エフェンディの世界 (The World of İsmail Ferruh Efendi)」では、タンジマート期後半にかけて、オスマン帝国内に起きた社会的変化を、特にオスマンエリート層の読書文化を通じて考察している。本章でシヴィルオールは、イスタンブールの1830年代の遺産目録を使用して、官僚層が所蔵していた本の調査を行っている。この調査に依拠して著者は、19世紀後半に向けて起きた主な変化として、①文章から非ムスリムへの蔑称が取り除かれ、市民の平等を前提とした法的用語に置き換えられたこと、②写本から印刷本への移行が進んだこと、③上級官僚から下級官僚に至るまでの間で、過去に見られないほどの、多様なジャンルの本が所蔵されていたこと、を指摘する。そして、こうした変化は、タンジマート期を通じて起きた知的体系のパラダイムシフトを表していると結論付ける¹³。遺産目録では、コーランや時祷書など、いくつかのイスラム関連の宗教書のみが記載されている官僚が多く見られた一方で、膨大な蔵書や西洋で出版された書物を所有していたものもわずかに見られた。

そうした一例として19世紀の初めに中級官僚として活動していたイスマイル・フェルフ・エフェンディの遺産目録が紹介される。彼の蔵書には、イスラム文化における古典的な書物も見られた一方で、聖書や西洋社会で出版された様々な自然科学に関する本も見られた。後のタンジマート官僚の先駆けではあったものの、決して突出した学者などではなかったイスマイル・フェルフ・エフェンディのような人物の蔵書においてこうした一般的官僚との変化が見ら

れたことを著者は重視し、こうした事象はオスマン社会の変化の兆しであるとした。シヴィルオールは、従来、イスラム圏においては、限られた本を繰り返し読む精読文化が一般的であったこと、しかし、そうして形成されたイスラム的世界観がヨーロッパと関わる中で変化に迫られたことを説明しながら、遺産目録に見られた、多様な蔵書や西洋で出版された本を所有した官僚たちが19世紀の半ばにおいて進行していた知的体系の変化の前兆であったことを主張している¹⁴。

第4章「公衆の教化 (The Schooling of the Public)」では、オスマン帝国における公衆への知識普及の過程とその影響が考察される。1774年の露土戦争での敗北後、オスマン帝国では、本格的に近代教育の導入がなされ、タンジマート期を通じてスルタン・アブデュルメジト (在位1839～1861年)、スルタン・アブデュルアズィズ (在位1861～1876年) のもとで公教育の改革が進められた。本章では、オスマン帝国初の大学 (Dârülfünun) での活動や、公衆の教化を目的とした社会組織の設立を通じて科学的知識が提供され、多文化であったオスマン社会に新たに共通の知的枠組みがもたらされることで、公論の統一が促されたこと¹⁵や、政府の支援下で、オスマン科学協会 (Cemiyet-i İlmiye-i Osmaniye) が設立されたことを契機として、数多くの社会組織が設立され、社会に公衆が交流する場が新たに提供されていったことが指摘されている¹⁶。大学の授業は、公開セミナーの形をとり、身分や宗派の別を問わずに授業が公開された。シヴィルオールは、当時の諸新聞においてこうした公開セミナーが差別なく全員に開かれていると強調されることで、観客

¹² Ibid., p.87.

¹³ Ibid., pp.126-133.

¹⁴ Ibid., p.133.

¹⁵ Ibid., p.151.

¹⁶ Ibid., p.170.

が自らを同質的な公衆の一部として認識することが促されたとしている¹⁷。社会組織の増加に関しては、政府は当初これらの組織を市民精神(civic spirit)¹⁸の表れとして支援していた。しかし、やがてこれらの組織が政府の管理下に収まらなくなると、活動の監視や監督へと態度を硬化させたことが指摘される。それと同時にオスマン官僚の邸宅が政治的影響力を失いつつある中で、こうした社会組織が新オスマン人に代表されるような政治批判のための場所として機能したことが述べられている¹⁹。

第5章「1860年以降における読書する公衆の出現(The Emergence of a Reading Public after c.1860)」では、オスマン帝国における民間紙の登場と発展、そして、それに伴う職業文筆家、知識人の誕生が取り上げられる。

1840年に、オスマン帝国初の民間紙として創刊された『時事通信(Ceride-i Havâdis)』は、政府による公衆の教化を目指す政策の一環として、発行者のウィリアム・チャーチルが政府から助成を受ける形で誕生した。著者は、『時事通信』紙の事業としての成功は否定している一方で、歴史的影響として、『時事通信』紙の登場によって、新聞事業の政府による独占が取り崩され、1860年以降の民間紙の増加を導いたことを重視する²⁰。

こうした民間紙の増加は新聞の商業化と深く関係していた。1853年のクリミア戦争によって、市民の間で戦況把握への需要が高まり、新聞の発行部数が急増したことは、新聞業の事業としての確立を促した。こうして経済的に自立した民間紙が誕生し、1860～70年代には新

聞の商業化が加速する。新聞の商業化が公論形成に果たした影響としては以下の2点が指摘される²¹。1つ目は文筆家が貴族的パトロン関係から解放されたことである。これは究極的に公衆を自らの後援者とする批判的な知識層を生み出し、やがて文筆家が宮廷と関係することは批判の対象とさえなる。2つ目は、コーヒーハウスなどを通じて広範な社会層に届いた新聞により、政治的議論に必要とされる情報がもたらされ、読者の政治的議論が活発化したことである。この段階において、1871～1872年の大宰相マフムト・ネディム・パシャに代表される政府による新聞への弾圧はすでに意味をなさなくなっていた。

新聞が公衆の教化のための手段を超えて、様々な議論の場を提供することで公論形成の媒介となり始める中で²²、こうした議論をリードする知識人も登場した。著者は、この中で、公論を普遍的な支配原理として説き、公論とその政治的影響力を公衆に定着させることに貢献した人物として新オスマン人を代表する啓蒙家であるナームク・ケマルに注目している。ケマルは立憲制や公衆による政府の監視の正当性をイスラム的伝統と照らし合わせながら説明した。そして、公論の影響力の強さを公衆へと繰り返し説き、政府の諸政策を取り上げて「公論の審判(tribunal of public opinion)」にかけていった²³。こうして新聞の普及と批判的知識人の登場によって、社会における政治的議論が活発化した。

また、この他に、本章では近代化に伴って新たに生まれたいくつかの公共空間も言及され

¹⁷ Ibid., p.153.

¹⁸ Ibid., p.170.

¹⁹ Ibid., pp.171–173.

²⁰ Ibid., p.183.

²¹ Ibid., pp.185–196.

²² Ibid., pp.195–196.

²³ Ibid., pp.213–214.

る。1つ目は印刷所であり、シヴィルオールは印刷所を文化的交流の重要な拠点であったとする。外国資本の投資によって法的な保護を受けていた印刷所が新オスマン人の拠点となっていたことなどを例として挙げながら、印刷所では宗派を問わず様々な人々の参加によって形成される公共空間が実現されていたとする。さらに蒸気船もそうした多様な人々の交流を促した空間として挙げられる。近代化に伴い発達した蒸気船は人々の生活の一部となったが、そこでは社会的地位や性差にとらわれずに様々な人々が乗船し、同じ空間を共有し会話が交わされた。シヴィルオールはこうした蒸気船にはオスマン帝国における伝統的公共空間であるコーヒーハウスよりも影響力があったと主張している²⁴。

第6章「トルコ革命（‘The Turkish Revolution’）」では、公論の政治的影響力を検証するために1876年の立憲クーデターの考察がなされる。スルタンであるアブデュルアズィズを退位させ、スルタン・ムラト5世（在位1876年5～8月）の下での憲法制定を目指したこの出来事は、従来、オスマン史研究において、高級官僚たちによって秘密裏に進められた宮廷クーデターとして扱われてきた。しかし、シヴィルオールはこの事件が公衆の政治的主体性の増加に伴って高まっていた批判的世論によって可能になったことを示し、当時のオスマン帝国において、世論の政治的影響力が十分に認識されていたことを主張する²⁵。また、その後ムラト5世に代わり即位し、オスマン憲法を公布することになるスルタン・アブデュルハミト2世（在位

1876～1909年）が自由主義的な改革に対して消極的であるにも関わらず、公衆による反乱に遭わず支配を確立したことも、結果的に公論がアブデュルハミト2世を支持した結果だと指摘される。

結論部において著者は、オスマン帝国において従来暴動や騒乱を想起させる不吉な含みを持っていた「公論」という言葉が、19世紀において公衆の政治的な意思を表すようになったことを確認する。そして、オスマン帝国における公論の出現過程とその政治的影響力を示すことで、オスマン帝国における公衆の政治的役割を軽視する従来の歴史記述を見直し、近代オスマン帝国史における公衆の政治的意識と影響力を考慮する必要性を強調している²⁶。

3. 本書の意義と疑問・批判点

これまでの多くのオスマン史研究では、公共性や公論は、国家と社会の政治的関係を軸に語られてきた。長い間、オスマン帝国における国家と社会の関係性は二項対立的に扱われ、「東洋的専制」という枠組みの下で、国家の強大な権力と社会の受動性が強調されてきた²⁷。フェロズ・アフマド（Feroz Ahmad）は統治者の絶対的権力に挑戦することのできる社会的主体がアジアでは欠如していたことを指摘し、その原因をスルタンの土地所有と裕福な商人の政治への不参加に求めている²⁸。

このような国家と社会との関係の捉え方は、ハーバーマス（Jürgen Habermas）による「公共性」や「市民社会」に関する議論とも親和性を持っていた²⁹。ハーバーマスは、国家と社会を

²⁴ Ibid., p.209.

²⁵ Ibid., pp.222–223.

²⁶ Ibid., pp.250–254.

²⁷ Özbek, Nadir, “Defining the Public Sphere during the Late Ottoman Empire: War, Mass Mobilization and the Young Turk Regime (1908–1918).”, *Middle Eastern Studies*, Vol.43, No.5, pp.795–809, 2007, p.795.

²⁸ Ahmad, Feroz, *The Making of Modern Turkey*. London ; New York: Routledge, 1993, p.21.

²⁹ ユルゲン・ハーバーマス著、細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究——』未来社、1994年（第2版）。

二分し、西洋諸国において後者が資本主義の発展とともに前者の恣意性を制御するための批判的領域として発展したことを提示し、これを「市民的公共性」、「市民社会」と呼んだ³⁰。この議論によりオスマン帝国における市民社会性の欠如が強調される一方で、その反発としてオスマン帝国史研究において、その「市民社会」性の探究が進められていくことになる。

ガーバー (Haim Gerber) はスルタンの法の順守、社会における自治的領域の存在、官僚層の政治的主体性を挙げながら、オスマン帝国における市民社会の存在を主張した³¹。他にもタンジマート期以降に活発化していく出版物によって創出された公共的な言論空間を取り上げた研究³²や実際に政治的議論の行われていた場に着目した研究も進められている³³。これらの研究では政治に関して批判的に議論を行う公衆によって形成される公共空間が取り上げられ、公衆の政治的主体性が示されることで、オスマン帝国における市民社会性の存在が強調される。

このなかで、フリーソン (Elizabeth B. Frierson) やオズベク (Madir Özbek) による研究では³⁴、大衆や家族向けの廉価な雑誌や慈善組織による愛国的活動が政府による一般大衆の動員に貢献していたことが明らかにされている。ここ

では、公共空間は社会による国家に対する批判的な空間としてではなく、国家と協働し、政府の社会への影響力の拡大に貢献した空間として捉えられている。

これに対して、オスマン的な公共性を探る近年の研究の傾向としては、国家と社会の対立関係ではなく、国家と社会が双方に影響を与えていたことが重視される。タンジマート期にオスマン政府によって市井で行われていた公衆の会話への諜報活動のレポートをまとめたクルル (Cegiz Kırılı) の単著では、公衆や公論が政治的権威を得る過程が、オスマン帝国の統治手法の変化と連動していたことが指摘されている³⁵。クルルによれば、マフムト2世以降行われるようになった、自画像の公共の空間での掲示や官報やスルタンの巡行を通じて、スルタンが可視化されることによる権威の具現化と、その権威の受け手としての公衆もまた人口調査や公衆衛生に関する調査を通じて可視化されたことでオスマン公衆、公論が形成されていった。これらの研究では、トプラク (Binnaz Toprak) が主張するように、オスマン市民社会の発展が国家によって準備されたこと³⁶が主張される。

一方で、公共空間を非政治的な視点から分析する試みもみられる。こうした中で、ミハイル (Alan Mikhail) のイスタンブールの街区

³⁰ 斎藤純一著『公共性』岩波書店、2000年、pp.28-29。

³¹ Gerber, Haim, "Ottoman Civil Society and Modern Turkish Democracy.", *Ottoman Past and Today's Turkey*. ed. Kemal H Karpat. Leiden, Boston: Brill, 2000, pp.133-149.

³² Frierson, Elizabeth B., "Cheap and Easy: The Creation of Consumer Culture in Late Ottoman Society.", *Consumption Studies and the History of the Ottoman Empire 1550-1922*. ed. Donald Quataert. Albany: State University of New York Press, 2000, pp.243-260; 佐々木紳著『オスマン憲政への道』東京大学出版会、2014年; Hanioglu, M. Şükrü, *A Brief History of the Late Ottoman Empire*. Princeton: Princeton University Press, 2008, pp.94-104.

³³ Kırılı, Cengiz "Coffeehouses: Public Opinion in the Nineteenth-Century Ottoman Empire.", *Public Islam and the Common Good*, ed. Armando Salvatore and Dale F. Eickelman, Leiden: Brill, 2004, pp.75-97; Çaksu, Ali. "Janissary Coffee Houses in Late Eighteenth-Century Istanbul.", *Ottoman Tulips, Ottoman Coffee*. ed. Dana Sajdi. New York: Tauris Academic Studies, 2007, pp.117-132.

³⁴ Frierson, Elizabeth B., "Gender, Consumption and Patriotism: The Emergence of an Ottoman Public Sphere", *Public Islam and the Common Good*, ed. Armando Salvatore and Dale F. Eickelman, Leiden: Brill, 2004, pp.99-125; "Cheap and Easy: The Creation of Consumer Culture in Late Ottoman Society", *Consumption studies and the history of the Ottoman Empire, 1550-1922*. ed. Donald Quataert. Albany: State University of New York Press; Özbek, op.cit.

³⁵ Kırılı, Cengiz, *Sultan ve Kamuoyu: Osmanlı Modernleşme sürecinde "Havadis Jurnalleri" 1840-1844*. Beyoğlu, İstanbul: Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları, 2009.

³⁶ Toprak, Binnaz "Civil Society in Turkey", *Civil Society in the Middle East*, ed. Augustus Richard Noeton. pp.87-118, New York: Brill, 1996, p.87.

(mahalle)におけるコーヒーハウスの研究³⁷などはこれまでとは異なる視座を提供していると言える。ここでは、公共空間を国家に対する政治的対抗の空間ではなく、居住区の人々が集まり、交流する空間として広く捉えることで、生活文化の側面からオスマン帝国における公共空間の独自性に迫ろうとしている。ミハイルは、オスマン帝国において公的空間と私的空間とは非常に流動的なものであり、コーヒーハウスは公的空間であると同時に、私的空間である自宅の延長としての役割も負っていたことを当時の人々の生活面に注目することで明らかにしている。こうした研究では、オスマン社会においてローカルな次元で実現していた公共空間の探究が進められている。

本書において、シヴィルオールは、序章で述べているとおり、啓蒙文化(the Enlightenment culture)によって育まれた市民社会や資本主義の発展に伴うブルジョワ層の存在といった「真の公共圏(true public sphere)」のための前提を持たず、西洋列強とは異なる歴史をたどったオスマン帝国が、それでもなお公論が形成される社会領域を作り出していたことを示そうとしている³⁸。こうして、西洋的な公共圏の出現をオスマンの文脈で説明することを試みたと言える本書であるが、その過程において著者がオスマンの公論出現の特徴として最も強調する点は近代化へ向けた国家の試みが社会にもたらした影響である。本書ではイエニチェリが解体され、官僚層が台頭していき、やがて様々な社会組織やメディアを通じて政治が公衆へと広がっていく過程がオスマン政府による近代化の試みと連動していたことが主張される。特に、公衆の教化を目的として政府が科学協会などの社会組織を設立したことや初の民間紙である

『時事通信』紙の発刊への援助を行っていたことなどは、オスマン社会における公論醸成の契機が政府によってもたらされたことを明確に表している。当然、政府は、こうした公衆の教化が自らの管理下で行われることを望んだが、やがては急増していくメディアや社会組織は政府の監視下には収まらなくなり、1876年のアブデュルアズィズの退位へとつながった。

以上のように本書で語られる、宮廷にとどまっていた政治が社会へと開かれていき、やがて公論が発生するに至る過程はハーバーマスによる議論と重なるものがある。しかし、1990年代以降のオスマン史研究において、オスマン社会における市民社会性や公論に関する探究が活発に進められる中で、公論の出現を包括的な形で説明したものは、本書以外には管見の限り見当たらない。こうした、18世紀末からのオスマン帝国における政治体制の変革を公論が政治的影響力を持つ過程と結びつける視点はクルルによっても提示されているが³⁹、セリム3世からアブデュルハミト2世に及ぶ1世紀にわたる時代を包括的に扱ったものはなく、オスマン帝国における公論出現の全体像を把握しようと試みた点で本書は非常に意義深い作品となっている。

また、本書を通じて、従来のオスマン史研究ではあまり注目されなかった事象も取り上げられており、オスマン社会史研究に新たな視座を提供していると言える。例えば、1876年のアブデュルアズィズの退位は一般的に上級官僚たちが秘密裏に実行した宮廷クーデターとして捉えられることが多いが、シヴィルオールは、オスマン帝国初の憲法の制定にもつながっていくこの事件の原動力を、18世紀を通じて醸成されたオスマン公論として結論付けている。19

³⁷ Mikhail, Alan "The Heart's Desire: Gender Urban Space and the Ottoman Coffee House.", *Ottoman Tulips, Ottoman Coffee*. ed. Dana Sajdi. New York: Tauris Academic Studies, 2007, pp.133-170.

³⁸ Şiviloğlu, pp.14-15.

³⁹ Kırılı, 2009, p.17.

世紀半ば以降の、新オスマン人をはじめとした立憲制議論の盛り上がりとその事件が結びつけられることは多いものの、依然としてこうした研究の中心には当時の知識人や高級官僚が置かれ、オスマン公衆にライトが当てられることはあまりない。18世紀末からの、1世紀にわたる公論の形成と発展に注目し導き出されたこの結論は、議会の設立へもつながっていくこの重要な事件の理解に新たな解釈を示している。

また、著者がオスマン社会における社交の場として提示した、官僚の集会や印刷所、蒸気船などの公共空間は、盛んに研究が行われているコーヒーハウスに比べて言及されることがあまりない領域である。これらはコーヒーハウスや公衆浴場、床屋など伝統的な社交空間に加えて近代化に伴う形で新たに芽生えた公的空間であり、著者が説明する近代化と連動する形で政治的議論が国家から社会に広がっていく過程を説明するために適切な材料となっている。こうした近代化に伴って生まれた公共空間は今後も更なる研究が期待できる分野だろう。

しかし、その一方で、問題と思われる点もいくつか存在する。1つ目に、本書の目的として、西洋社会とは異なる歴史的軌跡をたどったオスマン帝国における公論の出現を提示すること⁴⁰が挙げられているが、本論で取り上げられる官僚の邸宅における集会、公衆の教化、民間紙の発展、批判的知識人の出現など多くの事象がハーバーマスによる『公共性の構造転換』における議論と重なる。その結果、印刷所や蒸気船、官僚の邸宅における集会など興味深い点にも注意が向けられてはいるものの、オスマン帝国と西洋社会における公論の発展過程の違いが明確に示されず、著者の主張するオスマン公論の独自性が曖昧なままにとどまってし

まっている。ハーバーマスの議論は現在に至るまでに様々な角度から検討が重ねられており、批判点も提示されている。そのため、著者はそれでもなおハーバーマスの枠組みを用いる理由を明確に示す必要があっただろう⁴¹。また本書では、オスマン帝国の公共性を巡る先行研究に言及がなされていない。そのため、本書が研究史上のどのような問題意識を踏まえて執筆されたかについても十分に説明がなされていない。こうしたことも本書の独自性を明確に提示できない1つの原因となっている。

以上の点に関連して、本書がしばしば抽象的な議論に留まってしまい、主張に即した具体的説明が与えられないことも各所での主張を曖昧なものにしている。例えば、第3章において、著者はトマス・クーンの議論に依拠しながら、19世紀にオスマン帝国において知的体系のパラダイムシフトが起きたと結論付ける。この際、著者は19世紀後半に至るまでのオスマン帝国が、宗教書をはじめとするいくつかの本を繰り返し精読していくような読書文化を持っていたことを指摘し、オスマン帝国がイスラミ知識体系の中にあつたことを提示している。そして、そうした知識体系が立ち行かなくなり新たなパラダイムへの転換がなされた結果起きた変化として、著者は、①文書における非ムスリムへの蔑称が撤廃されていること、②写本から印刷本への移行が進んだこと、③多種多様な本が所有されていたこと、を挙げている。しかし、イスラミ知識体系とパラダイム転換後の新たな知識体系の具体的内容にまでは踏み込んでおらず、パラダイムシフトが示すような知的体系の根本的な転換が起きたと結論付けるのに十分な根拠を示すことができていない。こうした主張を論理づけるには、オスマン帝国を支配し

⁴⁰ Ibid., p.15.

⁴¹ Ibid., p.14では、ハーバーマスの提示する政治的公共性の規範的性質が多くの歴史家に批判されてきたことに簡単に言及している。

ていたイスラム的知的体系がいかなる課題に衝突し、そしていかに変遷したかを具体的に示す必要があるだろう。

また、第5章において、近代化に伴い新たに生まれた公共空間として蒸気船が取り上げられる。大陸をまたぐ都市であるイスタンブルにおいて船は日常的な交通手段として生活の一部に組み込まれていたが、1854年以降の蒸気船の定期運航は、新たな社交空間を作り出す契機となった。蒸気船のデッキの上では様々な宗派、民族からなる乗客が同じ空間を共有し、会話を交わしていた。また給仕によってコーヒーや紅茶なども提供されていた。著者はこうした性質から蒸気船をコーヒーハウスに例え、sailing coffeehouseと呼んでいる⁴²。著者は当時の小説や新聞記事の中から当時の蒸気船上での様子を抜き出しながら、性別や宗派を問わず参画することのできたこの空間が公論形成を可能にする空間であったことを提示する。しかし、結論として著者が述べる、「蒸気船は社会の様々な階層の人々を新たな状況に置き、当時存在した、いかなるコーヒーハウスや社交クラブよりも影響力のあるものになった」⁴³という主張には詳しい説明が与えられない。こうした近代化に伴う形で新たに発生した公共空間に着目することは非常に有意義であるものの、その影響力を他の公共空間と比較することは非常に難しく、具体的な根拠抜きに蒸気船の影響力があらゆる公共空間に勝るものであったと断じることができないだろう。

本書で設定されている研究対象にも問題点を見出すことができる。本書は、オスマン公衆を、オスマン語を話し、読むことができる人と

定義づけている。そのため、帝国内のギリシア人共同体やアルメニア人共同体は対抗する公衆(counterpublics)としてみなされており、本書の考察の対象外とされている⁴⁴。クルルが指摘するように、これまでの主要なオスマン史研究は、明確に区分けされた宗派共同体の存在を頑なに想像し、こうした共同体間の社会的交流をナショナリスティックな枠組みによって説明してきた⁴⁵。しかし、これでは宗教、民族、言語的に多様な人々から成るイスタンブル社会で実現されていた宗派的区分を超えた複雑な社会的交流は捉えられない。なぜなら意見(opinions)は、都市において、日常的な共同体を超えた対話を通じて形成されていたからである。こうした点は藤波伸嘉も「オスマン社会における「公共性」の在り方を、特に都市的な行動様式の下におけるその表出を考えるのなら、その多民族多宗教性を正面から取り上げる必要がある」⁴⁶と指摘しているように、オスマンの公共性を考える際に見落とされがちな点であり、本書もこうした点が十分に考慮されているとは言い難い。

この点に鑑みて、特に検討を要する点は著者が「オスマン公論」出現の立役者としてナームク・ケマルを取り上げていることである。ケマルに代表される新オスマン人は、イスラムという宗教の先進性を指摘し、その運用における墮落こそがオスマン帝国の西洋列強に対する遅れをもたらしたと主張した。彼らはイスラムに沿った改革を求めており、イスラム的な活動を進める存在として自らを提示していた⁴⁷。このことは、ナームク・ケマルをはじめとする新オスマン人がムスリム集団の代表として活動していたことを表している。彼らは必ずしも、オスマン

⁴² Ibid., p.207.

⁴³ Ibid., p.209.

⁴⁴ Ibid., p.19.

⁴⁵ Kırılı, 2004, pp.91–92.

⁴⁶ 藤波伸嘉『オスマン帝国と立憲政——青年トルコ革命における政治、宗教、共同体——』名古屋大学出版会、2011年、p.17.

⁴⁷ 新井政美『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』青土社、2009年、p.145.

公衆一般を代表する存在としての自意識を持ち合わせていなかった。

シヴィルオールは、ナームク・ケマルがその多数の著作を用いて、オスマン社会において初期段階にあった公共性に政治的影響力を持たせたとし、公論に言及した記述も数多く引用している。しかし、ケマルがここで公論という言葉によって、どのような集団を想定していたのかには注意を払わなければならない。なぜなら、ケマルにとってオスマン公衆は、宗教的区分を基に成り立っているからである。例えば、1866年から始まったクレタ島での蜂起に際して、ケマルが運営する『公論述報 (*Tasvîr-i Efkar*)』紙は「叛徒」を支援するギリシア政府に対するオスマン政府による強硬的な対処と、戦乱による被害を受けたムスリム住民への支援募金を呼び掛けた。この支援にあたって、ケマルはオスマン人をムスリムと非ムスリムに区別する姿勢を見せており⁴⁸、彼はここで募金に関して、イスラム宗教共同体が他の諸民族に遅れをとってはいけないうとして、クレタ島のムスリム共同体のために、ムスリムのムスリムによる支援を呼び掛けていた⁴⁹。

また、ケマルの立憲議会論においても彼の宗教的区分の意識は明確であった。ケマルは議会と憲法の必要性について論じる際に、主権在民を説き、「いかなるウンマにおいても、主権は公衆のものである (*hakkı-ı hâkimiyet 'umûmundur*)」⁵⁰とする。ウンマという言葉には「ムスリムの信仰共同体」という意味と「ネーション」に対応する意味の双方が当てはめられるが、佐々木紳はここでのウンマが前者を表しているとしている⁵¹。その場合、この文脈におい

て「公衆」という言葉によってケマルが指示している集団はムスリムということになるだろう。そのため、ケマルが訴えかけた公衆は必ずしも「オスマン公衆」ではなかった。

ケマルが想定するオスマン公衆の内実や実際にケマルの記事がどのような人によって読まれていたのか。そうした具体性を伴った考察を通じて、初めてケマルが公論形成に果たした役割を論じることができるだろう。国家の近代化政策と公論の出現を追った本書は、特に議論が抽象的になりやすく、著者によって紹介された諸近代化政策が実際にどのような人々に影響を及ぼしていたのかという点まで議論が及ばず、話が理論的な次元に留まってしまった感がある。

4. おわりに

本書でシヴィルオールは、18世紀末から19世紀末においてオスマン帝国の近代化政策がオスマン公論の出現を準備していった過程を論じた。近代化に伴い、イエニチェリやアーヤーンと宮廷の間で構成されていた秩序が変化し、政治が官僚層、そして公衆にも広がっていくことで、政治的な批判が行われる公共圏が生まれた。そして、こうして出現した公論を背景に1876年にはアブデュルアズィズの退位が可能になったことが論じられた。

著者の議論は、ハーバーマスによって示された西洋社会における公論の出現を巡る議論と重なる部分が多く、オスマン公論の独自性が曖昧になっているなどいくつかの問題点を有しているものの、オスマン帝国における公論の出現が体系的に示されたことは今までになく、1876

⁴⁸ 佐々木, pp.28-32.

⁴⁹ 佐々木, p.31. 募金活動に関して同様の論調を採っていた『日報』紙に対して、活動主体をムスリムに限らないオスマン帝国諸集団に求めるべきだという批判が掲載され、これに関する議論や報道の結果、支援活動の主体がオスマン帝国の多様な集団を含む「オスマン人」に求められ、オスマン国民の社会運動としての性質を帯びる過程については、佐々木, pp.36-41を参照。

⁵⁰ 佐々木より引用。佐々木, p.114.

⁵¹ 佐々木, p.114.

年にオスマン帝国議会在設立されるまでに至る歴史の中で、政治がいかにして公衆にも開かれ、公論が政治的影響力を持ったのかを説明する1つの有意義な試みとなったことは間違いないだろう。本書では膨大な資料に依拠する形で、様々な視点から議論が展開されたが、オスマン帝国における読書文化や公共空間としての蒸気船などユニークな考察も行われ、コーヒーハウスや新聞の言論分析を中心に行われることの多いオスマンの公共性を巡る研究へと多くの可能性も提示した。また、こうして比較マクロな視点から、公論が論じられることは、今後、実際にオスマン公衆が生活の中で共有していた公共空間の巡るミクロな視点からの研究の補助線としての役割を果たすことにもなるだろう。